慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルクソンの哲学的生命観 II
Sub Title	Bergson's philosophy of life II
Author	星野, 慎吾(Hoshino, Shingo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.591- 611
JaLC DOI	
Abstract	本論分は,先きに発表した「ベルクソンの哲学的生命観I」に続くものである.その「哲学的生命観I」では,ベルクソンの生命論を考察する前に,ベルクソンが哲学というものをどう捕らえているか,を理解しておくことが必要であるということから,ベルクソンの哲学間が論述された.全論文に続いて,本論分ではベルクソンの哲学的生命観について論及する. This paper is the continuation of "Bergson's Philosophy of Life I" in which his original thinking way of philosophy has been explained. His psychological and physiological problems of philosophy of life are carried on into this paper. His propositions on them are the following: 1. Consciousness is successive mobility in itself and real time; that is, duree in his word. On the other hand, it is also memory and free creation. Beneath each consciousness, he presupposes in metaphysical and ontological sense Consciousness in general which is the fundamental creator of life. 2. Everything in the universe is the image in that it includes my own body. My body has a unique status among all images, for it delays in some cases its spontaneous reaction against the external actions, while in other cases does not act. So, it is the center of behaviors. 3. Perception is not cognitive in its nature, but is the possible and latent behaviours for the body. Real perceptions are eroded by memory. 4. Bergson formulates three hypotheses about memory.
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Treatise
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0591

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンの哲学的生命観 II

星　野　慎　吾*

Bergson's Philosophy of Life II

Shingo Hoshino

This paper is the continuation of "Bergson's Philosophy of Life I" in which his original thinking way of philosophy has been explained. His psychological and physiological problems of philosophy of life are carried on into this paper.

His propositions on them are the following:

1. Consciousness is successive mobility in itself and real time; that is, *durée* in his word. On the other hand, it is also memory and free creation. Beneath each consciousness, he presupposes in metaphysical and ontological sense Consciousness in general which is the fundamental creator of life.

2. Everything in the universe is the *image* in that it includes my own body. My body has a unique status among all images, for it delays in some cases its spontaneous reaction against the external actions, while in other cases does not act. So, it is the center of behaviors.

3. Perception is not cognitive in its nature, but is the possible and latent behaviours for the body. Real perceptions are eroded by memory.

4. Bergson formulates three hypotheses about memory.

(to be continued)

* 慶應義塾大学理工学部助教授

本論文は，先きに発表した「ベルクソンの哲学的生命観I」[1]に続くものである．その「哲学的生命観I」では，ベルクソンの生命論を考察する前に，ベルクソンが哲学というものをどう捕えているか，を理解しておくことが必要であるということから，ベルクソンの哲学観が論述された．前論文に続いて，本論文ではベルクソンの哲学的生命観について論及する．

ベルクソンの哲学的生命観

(I) 生理学的観点からの問題

1

先ず最初に，生命とは何であるかという生命の本質を明らかにするには，生命という現象はさまざまな姿で現われているものであるから，その種々さまざまな生命の現象のうちどれを手がかりとし，どの順序で取り上げて生命の本質に迫まるか，を明確にはっきりさせておくことが必要であろう．そのためには先ず，生命は具体的には生物として顕現し現象するものであるから，その生物体のうちでも，特に人間の身体の問題を第一に取り上げて考究することが重要である．人間があらゆる生物のうちで最も進化したものと考えられるからである．それは生命を生理学の観点から問題にすることである．そしてさらに，生命は一個体としてのただ一つの生物にだけあるのではなく，すべての生物にあるものである．生命というものの不可思議さとして，生命が種々さまざまな，驚くべきほど多様な姿の生物として現われている．であるから，生命を個別的に生理学の見地だけから研究しその一般的法則を探究するのでは不十分であって，第二には，生命をその全体において捕えるため生物学の立場から，地球上のすべての生物はどのように誕生し，進化したかをそれぞれの生物の特色および相互の相違，関連において追求し，生命の本質に迫ることが必要である．

このようにして，生命の全貌を捕えるには，少なくともその生理現象，生物現象の二つを取り上げねばならないのであるが，さらにそれに加えて，その心理現象も忘れずに問題とされねばならないものである．と言うのは，少なくとも常識的に反省するならば，生物が無生物すなわちたんなる物体から区別される基本的な判定基準は，意識の有無にあるとすれば，その意識とは何かということが生命論の根本にあることになるからである．

ベルクソンが直観という方法によって観得した意識とは，一つの連続した流動であり，状態と状態との継起であって，各状態は続く状態の先触れとなり先立つ状態を含んでいるものである．したがって，それらの状態を経験しつつある間は，それらは互いに緊密に有機的につながっており，一貫した深い共通の生命によって生かされているために，どこである状態が終ったのか，どこである状態が始まったのかの切れ目は存在しない．観得される事実をそのまま述べれば，意識のどの状態も始まったのでも終わったのでもなく，あらゆる状態が互いのうちへ延び入り溶け込んでいるのであって，そこにおいては，われわれの過去はわれわれの跡をつけてきて，その途上，現在を拾い上げては絶えず大きくなっていく間断のない連続した流動が存在しているのである．

このような意識の流れは，二度と帰えらぬものであり刻々に連続して滲透し合いながら，その内容を変えているのであるから，瞬間瞬間の意識状態はすべて相互に異質的なものである．ベルクソンは，このように異質的で，相互滲透しつつ流動する連続を意識の本質として観得し，それを持続 durée と呼びそれこそ時間そのものに他ならない，と言うのである．そして時間には，一方に流れる時間としての意識と，他方に流れた時間——動きがあとに残した痕跡として表現される時間——が区別されるのである．流れた時間は空間の位置によって示めされる同質的時間で，それは互いに交換可能であり，言葉をかえて言えばそれは時計で示めされる時間であるに過ぎず，実は空間なのである．流れる時間のみが真の時間なのである．

要するに，時間とは過去を含み未来を嚙んでゆく絶えざる自己生産であり，刻々に新たな創造である持続なのである．意識とはこの時間，この持続に他ならないのである．

このように意識の内的性格は解明されたのであるけれども，ベルクソンはついでそれが外部に対して持つ意味をも明らかにしている．意識は過去を保持し，それを現在に蓄積するのであるから，記憶を持つことこそ意識の本質なのである，と言う．それゆえ，意識とは記憶を意味しているのである．意識するものごとを意識する都度忘却するのであれば，それは無意識でしかあり得ないであろう．それ自身の過去を何も保存しない意識，絶えず意識自身を忘れる意識は，各瞬間毎に消滅して再生する意識であって，これこそ無意識の定義に他ならないであろう．実際，無意識な人とは無記憶な人なのである．しかしまた意識は，記憶を持つとともに一方で，未来をも先取し予想する．注意とは期待なのであって，生活に対する関心と注意を向けていない意識はないのである．要するに，すでにないものを記憶によって保持し，未だないものについて先取し先きを越すことが意識である．それゆえ，現在が観念的理論的な極限としての数学的な瞬間に還元されるとしたら，意識にとって現在はないことになるのである．この瞬間はたんに理論的なものとして，過去と未来を切り離す境界に過ぎないからである．厳密に言えば，この瞬間は考えられるものであって，決して知覚されないのである．この瞬間をつかんだと思うときには，それはすでにわれわれから離れてしまっている．われわれが実際に知覚するのは，過ぎたばかりの過去とすぐ後に来る未来の二つの部分からなるある持続の厚みなのである．したがって，意識はあったこととあるだろうこととの間の連結線であり，過去と未来の間にかけられた橋なのである．

ベルクソンは，これまでまとめて述べたように意識が作用するのは，生物が外界に働きかけるために選択を行なうからである，と言う．そして，意識的存在においては，意識が作用するのは脳の仲介を通じてであるから，

その意味では脳は選択の器官なのである．ただここでベルクソンが注意することは，意識は脳に必然的に結びついていると考えてはならない，ということである．われわれの意識は脳に結ばれている．だから意識は脳を持っている生物のものであって，他のものには意識は認めるべきではない，と言うことは誤りである．なぜならそのように言うことは，われわれの消化作用は胃に結ばれている，だから胃を持つ生物は消化作用をし，他の胃を持たない生物は消化作用をしない，と言うことと同じである．しかし実際は，胃のない生物にも消化作用はある．これと同じく脳のない生物にも意識はあるのであって，ただ生物は進化すると共に器官も進化し，人間に至って意識は脳に結びつくのである．すなわち，脳が意識に欠くべからざるものだというのではなくて，下等動物では神経系も単純であり，さらに下等な生物ではその神経の要素さえ消えているのである．しかしそれでもそれらの生物には意識はあるわけである．ベルクソンの生命論においては，神経が意識を生むのではなく，意識が神経を作ったのである．したがって，生物のあるところには必ず意識があるのであるから，生物はすべて意識的であり得るのであって，原理的には，意識は生命と同じ広がりを持っているのである．そしてその意識は選択を行なうためのものである．全然選択のない存在とはまったくの必然的存在であり，それはもはや生物ではなく無生の物質である．このことから明らかにされてくることは，意識が過去を保存するのは，それによって選択を行ない，未来を自由に切り開くためであるということである．そうして人間の脳はこの選択の自由度が最も大きいものなのである．意識とは結局のところ，自由に作るもの，創造するものである，と言えてくるのである．

意識が選択を意味し，意識の役割が決断することであるとすれば，自発的に動かず，したがって決断しない有機体に，意識があるというのは疑わしいことである．しかし実は，自発的な運動が全然できないように見える生物は存在しないのである．有機体が一般に大地に固定されている植物の

世界でも，自分を動かす機能はないというよりも，むしろ眠っていると言うべきである．その機能は役に立ち得るときには目ざめるはずである．ベルクソンはすべての生物が，植物にしても動物にしても，原理的には自分を動かす機能を持っている，と主張する．しかし多くの生物では，事実においては，その機能が捨てられているのであるに過ぎない．他の有機体に寄生していて，食物を見つけるために移動する必要のない動物の中の多くのものがそうであり，そして大部分の植物がそうである．大部分の植物は，よく言われているように，大地に寄生しているのである．だから，意識は元来すべての生物に内在するものであって，自発的な動きがなくなっている生物においては意識は眠り，生命が自由な活動の方向に向かっている生物では意識は高まっているのである．

これまでに，意識は一方において持続であると共に，他方で選択および創造であることが論じられたが，この二つの事柄，持続と自由はどのように結びつくのであろうか．過去の保持，自分の過去を持っているということは，それに応じて独自的な仕方で外界に働きかけることである．自分の過去を持っていなければ，外からの作用に対しては独自の仕方で働きかけることができず，ただ一般的な自然法則に従って反作用するほかに道はない．それに対して自分の過去を保持し，それを適宜に働かせ得るとすれば，その程度に応じて生物はそれだけ外界に対して非必然的に，すなわち自由に働きかけ反作用できるのである．ベルクソンは，生命とは意識が物質を利用し，物質を組織化しつつ貫いて，自己を自由者として実現していく過程である，と述べている．したがって見方を変えれば，意識が物質をいかに支配するかに応じて，様々な生物が誕生するのであるし，それだけまた様々な精神も生ずるのである．そしてこのように一つの大きな意識の流動から種々様々に各意識が分化し，個別化しながら物質に潜入しそれを利用しつつ有機体化して行くところに生命が存在し，それこそ生命の特徴である，とベルクソンは指摘しているのである．それであるためには，個々に

分化し個別化していく生命の根底に，普遍的な流動する意識——ベルクソンはそれを意識一般 la Conscience en generale と呼ぶ——その意識一般が存在せねばならない．ベルクソンは，その根底にある流動を適切な名前がないので意識一般とでもいう表現を用いるのである，と断わっている．しかしそれはベルクソンの哲学においては，形而上学的ないし存在論的な概念であって，心理学上の意識とは区別して理解されねばならないものである．彼はまたそれを別に，精神力 énergie spirituelle とも内的衝動力 poussée intérieure とも呼んでおり，宇宙的生命と拡がりを同じくするものであるとも述べている．いずれにせよ，その意識一般は自己をますます自由にするために，物質の抵抗にさからってそれを利用しながら組織化しつつ，自分を特殊化し個別化していくのである．しかし分化した個々の意識は，もとを正せばすべては同じ一つの意識一般から分流して来たものである．したがって，個々の意識すなわち一つ一つの精神は，仲介者を必要とせずに相互に直接に共鳴し得る根拠がここにある，とベルクソンは見ているのである．精神的聴診 auscultation spirituelle や心的滲透 endosmose psychologique と呼ばれる一種の感応的共感の働く素地がそこに存在しているのである．

ともかく，意識一般は分化し，個別化し，特殊化していくことによって，ますます自由の度を進めていく．一般的な非人格的意識一般は，個別化するのに応じて自分の過去を持ち，そのことによって個性を現わし，自由を獲得していく．ベルクソンが以上のように解き明したことから，持続が自由であるということの意味もつぎのように開示されることになる．持続が自由であるとは，自己が自己になること，すなわち個別化し同時に個性化することである．持続を持つとは意識を持つことであって，それはまた記憶を持つことである．そしてそれは，その記憶が個性的になり，したがって人格的になって行くのにつれてその人は自由になる，ということなのである．

2

以上において意識について，ベルクソン哲学における肝心な所論を論述してきた．生物を生命のない物体である無生物から区別する重要な一点は，それにおける意識の有無であることは自明であり，しかも意識はベルクソン哲学においては特に生命とのかかわりの上で緊要な意味を持つものである．さて生命が具体的に現われているのは生物体としてなのであるから，つぎに生命を具体的に生理現象の側面から解明するには当然生物体における意識の身分，位置，現象について知る必要に迫られる．ここでベルクソンは，あらゆる生物のうちで最も進化したものと考えられる人間の身体を特に例として挙げて，生命の物体における具現のさまを身体の生理学として論ずるのである．特に人間の身体が選ばれる理由は，宇宙が全体として見ればそこには自然法則が支配していて，そこに生起する一切の現象は原因結果の必然性に覆われているのにもかかわらず，身体が一つの特殊な存在として，意識と物質の結びついた身心結合体であって，つぎのような特色あるものであるからである．

「私の身体」は外界からの働きかけに対して即座に反作用せずに，その反作用をときとして遅らせたり，ある場合にはまったく反作用をしない．そして，反作用をする場合にも，無生の一般物体のように一つの作用に対しては必ず一定の反作用を起こすのではなく，さまざまに異なった反作用を起こす．このように外からの作用に対して反作用する場合に，一種の選択が可能であり，また反作用をただちに起こさずに動作を遅らせることができるという点で，私の身体は宇宙の中に真に新らしいことを生起させることになり，特異な能動的な存在なのである．要するに，身体とは行動の中心なのである．

ベルクソンは身体ばかりではなく，存在するすべてはイマージュ image であるのを見い出すと言う．素朴にそのイマージュについて見てみれ

ば，それは感官を開らけば知覚され，閉ざせば認められず，そして相互に作用し反作用し合い，一定不変の自然法則に従っているといえる．イマージュはすべて相互に必然的関係にあって，それらの中から何か新らしいものが生起することは決してない．だから，私の身体がイマージュであれば，それと関連を持つすべてのものはイマージュとして仮定されることになる．と言うのは，物質的対象であって，その諸性質，その諸規定，結局はその存在をも，宇宙の全体の中でそれが占める位置に負わぬものはないからである，とベルクソンは説明している．したがって，私の知覚は，これらの対象そのものの何ものかであるほかはない．それらの対象が知覚の中にあるというよりは，知覚がそれらの中にあるのである．しかし知覚はこれらの対象のまさしく何ものなのであるかについては，私の知覚は，いわゆる感覚神経の興奮を細部までことごとく追うように見えるし，他方これらの興奮の役割が，もっぱら周囲の物体に対して私の身体の反作用を準備すること，私の潜在的作用をえがき出すことにある，ということが明らかに知られる．だから知覚することは，諸体象の総体から，それらに働きかける私の身体の可能的作用を浮き出させることにあることになる．それゆえ，知覚とは選択にほかならないのである．それは何ひとつ創造するものではない．その仕事は，反対に，イマージュの総体から，私の勢力のまったく及ばないイマージュをすべて排除し，さらに，それ自体として捕らえられたイマージュの各々から，私の身体とよぶイマージュの欲求にかかわりのないものをすべて排除することである．これらのことは「他人の身体」を例にとって考察して見ることで具体的になるであろう．他人の身体で特に問題となるのは，神経および脳である．ベルクソンはその神経も脳も当然イマージュであると言う．それは解剖学的に見て，目の前にあるイマージュであるが，たとえそれらをさらに何かの振動や運動であると考えても，それもまた一つのイマージュであることになる．したがって，この脳や神経の振動が身体の外にあるさまざまなイマージュを産み出すことは

出来ないものであることは明白である．一般に，産出ということが起こるためには，産出されるものが産出するものの中に何らかの意味で含まれていなければならないからである．だから今の場合でも，脳や神経の振動が身体外のイマージュを産み出すことは不可能なのである．脳細胞から宇宙が産出されてくるというようなことはあり得ないのである．すなわち，脳は宇宙の一部なのであって，宇宙が消滅すれば脳も無くなるけれども，脳が無くなっても宇宙は依然としてそのまま存在する．神経線維を切断してみても宇宙というイマージュは存在しているのであるから，脳が宇宙のイマージュを産出するものでないことは明らかであろう．無くなるのはただたんに私の知覚だけに過ぎないのである．神経線維の切断は，運動や振動が外界から脳中枢へ，また脳中枢から外界へ伝わるのを障害することになるだけなのである．言ってみれば，それはたんに運動や振動の問題だけなのである．だから，神経線維の切断によって知覚の消失が起こるということであれば，そのことはかえって知覚とは身体の可能的潜在的運動を浮き彫りにするものに他ならないということなのである．物質とはイマージュの全総和であるのに対して，物質の知覚とはこのイマージュが身体という特定のイマージュの可能的潜在的運動にかかわりを持つときのイマージュなのである．であるから，身体とは行動の中心であり作用の中心なのである．そして脳はその身体の運動をメカニカルに支配するものであり，たんにそれだけに過ぎないのである．人びとが考えるように，脳は表象を産み出すものでは決してないのである．

外界の対象に変化が起これば，当然脳の分子運動にも変化が起こる．そしてそのとき知覚も相応に違ってくるので，脳の分子運動と知覚はどう関係するのかの問題はどう理解されるであろうか．知覚はただ分子運動だけを翻訳するだけであるから，知覚はたんに大脳実質の運動のみを表象するものに過ぎない，と主張する立場があり得る．しかし，ベルクソンはそれは誤りであると言い，知覚はやはり外界の事物を表象するのである，と論

ずる．けれども，その外界の表象は脳によって産み出されるものではないのであるから，すなわち，脳というイマージュが外界のイマージュを産み出すことは有り得ないのであるから，外界の表象を持つとは宇宙における身体の位置を示すことなのである．このように，身体が宇宙の何処に位置づけられているかということは，宇宙にとっては些細なことに過ぎないが，身体にとっては重大問題である，とベルクソンは主張するのである．それでは，宇宙の表象が脳の分子運動に依存している理由は，どのように説明されるのであろうか．このことは，知覚というものが一般に純粋に知的なものである，すなわち純粋認識にかかわるものであるという謬見を是正することで解明される．知覚は純粋認識のためのものではなく，行動にかかわるものなのである．

神経の構造は，単虫類から高等な脊椎動物へと進化の段階を追って発達している．それに応じて，行動というものはアメーバの収縮運動から始まって，神経細胞の成立を経過して神経系へと進むにつれて，さらに反射運動から随意運動へと進化しているのである．けれども運動という点では，反射運動も随意運動も物理的，化学的には同じなのであって，それらの差はただ高等動物になるほど選択の幅が大きくなっているだけなのである．脳は受け取った刺激をそのまま反射運動に移すか，あるいはそれを分解しある時は必要な運動器官に伝達して運動を起こし，ある時は運動を待たせたり中止したりする．したがって，脳というものはいわば中央電話局のようなものであって，それは発信者と受信者を結びつけ，ある場合には待たせもするが，しかしそれだけのものである．中央電話局は，受け取ったものをただ発信者から受信者へ伝えるだけであって，受け取ったものに何かを附け加えることをしないように，脳も受け取った運動に関しては分解の器官であり，遂行される運動との関係で言えば選択の器官に過ぎないのである．脳は一般に考えられているように，表象を産出する器官ではない．神経系の役割は運動行為の必然性を減少させることにあるに過ぎないので

ある．だから脳は現実的行動の中心であって，知覚はそれにかかわりを持っている可能的潜在的動作，あるいは行動の可能性なのであるに過ぎない．何かを知覚しているとは，それを利用したり，それに働きかけることができるという可能的潜在的行動の状態にあるということなのである．したがって，知覚があるとは，言いかえれば行動が直接的ではないことでもある．下等動物はたとえば餌を知覚すると即座にそれに跳びかかり，危険を知ると同時に逃げ去る．しかしその一方で知覚の発生は，必然的反射的行動からの解放を意味し，間接的選択的行動の創造の土壌なのである．知覚というものはただに行動のためのものであって，いずれにしても純粋認識を目的とするものではない．

知覚が純粋認識でなく，可能的潜在的行動であるのにもかかわらず，意識と呼ばれるものにかかわりを持ち，脳内の分子運動から生じてくるように思われる点はどう説明されるであろうか．その点をベルクソンは，純粋知覚という現実には存在しないけれども，理論上その極限に仮定され得るものを取り出して解明する．もともと通常の知覚には，具体的知覚として別の要素である記憶が多少とも混入しているのである．したがって，具体的知覚を用いたのでは知覚独自の性格が把握しにくくなるので，純粋知覚を特に考察するわけである．そうすると，純粋知覚にとっては，それには記憶がまったく混入していないのであるから，存在するものはすべてイマージュである．しかもそのイマージュというものはただ存在するだけであっていいのであり，必ずしも知覚されてあることは要しない．そして一般に，表象は知覚を通して成立するが，それは存在に何かが加わって成立するのではなく，むしろ反対に存在から何かが欠如して生まれるのである．何故なら，分離された一つのイマージュは宇宙の他のすべてのイマージュに本来は全体的に関連し合い，融合しているのであるけれども，表象が生まれてくるのは，その一つのイマージュをわれわれが他のすべてのイマージュから切り離し，孤立化するときだからである．言いかえれば，われわ

れをとりまくイマージュがある種の自発的な反応にどこかでぶつかれば，それらのイマージュの作用はそれだけ減少する．この作用の減少がまさにわれわれがそれらのイマージュについて持つ表象なのである．だから事物についてのわれわれの表象は，結局のところ，それらのイマージュがわれわれの自由にあたって反射することから生まれるのである．したがってそうであるから，知覚というものは実はイマージュを明晰判明にするものではなく，逆にイマージュをそれ本来のものより矮少化し，模糊とするものなのである．行動の中心としての身体は，知覚を媒介にしてそのような操作を行なっているのである．すべてが関連し合って全体的に現われているイマージュの中から，身体は自分の行動のためにその一部だけを切り取るのである．それゆえ，知覚は対象を明晰判明に認識させるのである，と普通われわれが考えているのは誤りであって，それは実際には対象をむしろ曖昧模糊に認識させているに過ぎないのである．ベルクソンはあくまでも，知覚というものは身体が自分の行動のために，自分の仕方で存在の一面を切り抜いたものに過ぎない，と論ずる．それゆえ，知覚というものは元来存在をそのありのままに，純粋に認識させるものではないのである．その意味では，存在することと知覚されることとは，すなわちイマージュと表象の相違は，物質と精神といったような異質的二元的に対立するものなのではなく，ただ程度の差に過ぎないのである．ただ表象はイマージュより貧弱なものに過ぎないだけなのである．たんに存在することと表象されてあることの関係が，ここに述べた如くであるから，知覚成立のために意識が積極的に作用を及ぼし，それを変形することはないし，脳内の分子運動から発する燐光の輝きのように知覚が創造されることもないのである．知覚において問題になることは，それがどのようにして生まれるかということではなくて，と言うのは知覚は権利上は全体のイマージュなのであるから，それがどうして限定されるのかということなのである．このことに対してベルクソンは，それはわれわれの行動的関心のためである，と

答えるのである.

知覚の成立に関連して，いかにして感情が生まれるのかが当然問題になる．言ってみれば延長的なイマージュである知覚から，どのようにして感情という非延長的なものが生まれてくるのか，ということである．そもそも知覚は可能的潜在的行動であることが解き明されたのであるけれども，そのことは言いかえてみれば，対象がそれだけ身体に関係づけられ近づけられたことを意味している．そこでベルクソンは，その対象がますます身体に接近し，最終的にそれらの間の距離が零になるとき，すなわち自分の身体そのものがその対象となったとき，そこに生じてくるのが感情である，と言う．感情は身体内に，知覚は身体外に成立するわけであるし，知覚が身体の反射力をはかる尺度だとすれば，感情は身体の吸収力をはかる尺度なのである．このような由来であるからして，感情は知覚の特殊な形であるとも言えるし，感情はわれわれが外界の物体のイマージュに混入し重ね合わさせたわれわれの身体内部の側のイマージュであるとも言える．したがって，感情は一般に言われるように非延長的なものではなく，多少とも延がりを持ち，そしてそれが感覚として局所化されるとともに，ますます拡延的となるのである．だから，たとえば痛みやかゆみは身体の痛い所，かゆい所に存在しているのである．知覚となるに至っては明瞭な空間性を持っていることは言うまでもない．とにかく，身体というものは一つの特権的イマージュであって，あらゆるイマージュの総体の中に存在しており，その中にあって感覚＝運動性という二重性を持っていて，行動の源泉であるとともに感情の座でもあるのである.

純粋知覚はあくまでも物の一部であることがかくして明らかにされ，しかも現在のうちにのみ存在していることが理解される．しかしながら，それは純粋知覚においてそうなのであって，現実の具体的知覚には記憶という過去のイマージュがつねに多少とも結びついている．現実の実際の知覚にはどれもいくばくかの過去の知覚が侵入していて，まったくの真に現在

の知覚というものは極めてまれなのである．事実，われわれが未来に働きかけるには，それに対応して同じだけ過去を振り返ることが必要であり，前進するわれわれの活動の圧力は，その後ろに空虚を生じさせてそこに記憶がなだれ込むのであって，かくして記憶とは，われわれの意志の不確定が認識の領野に反映したものである，ということもできよう．われわれが知覚したときにそれが何であると知れるのは，その知覚に過去が入っているからであるし，それゆえにこそ知覚がわれわれの行動に役立つのである．過去なしに，現在の知覚だけでそれが何であるかを知ることは，莫大な精神のエネルギーと極度の精神の集中が必要とされ，実際には不可能に近いものである．具体的知覚には過去のイマージュが侵蝕していることからして，知覚は具体的には持続を持っているのである．かくして，現在の知覚に過去の知覚を結びつけているものこそ記憶である．知覚はたしかに記憶にひたされているが，逆に記憶もそれが入り込むなんらかの知覚から身体を借りることによって初めて再び現前する．だから知覚と記憶というこの二つの作用は，つねに浸透し合い，ある浸透現象によって，絶えずそれらの実質のいくらかを交換しているのである．ここで記憶を問題にしなければならないが，そうすることはとりもなおさず，脳（身体）と記憶の関係を考察することである．

3

ベルクソンが脳と記憶の関係について究明した結果は，つぎの三つの命題にまとめられている．

（1）　過去は異なった二つの形式のもとで残存する．運動機構としてか，独立的な記憶すなわち思い出としてかである．

（2）　現在の対象の再認は，それが対象から生ずる場合は運動によって行なわれ，認識主体から発する場合は表象によって行なわれる．

（3）　時間の経過につれて配列される記憶（思い出）から，何時とはな

くおのずからな推移をへて，運動への移行が行なわれる．この空間のうちに粗描される運動は生まれつつある現実的行動あるいは可能的行動の構図をえがく．脳の損傷はこの運動への移り行きを冒すけれども，この記憶そのものを冒すことはない．

これら三つの命題が経験によって検証されることを，ベルクソンは順次証明していくのである．

(1) の証明

過去が二つの異なった形式のもとで保存される，ということを証明するためベルクソンは，学課の暗誦を例にとって説明する．学課を暗記するのには，先ず音節を区切りながら各文章を何度も繰り返して読む．読み返すことを続けていくうちに，言葉と言葉はだんだんよく結びついて行き，ついには一つにまとまる．このようにして学課の暗記は成就される．この場合には，記憶は二つの形式において保存されていることが明らかになる．第一の保存形式では，暗誦される言葉が何の苦労もなしにますますよく結合し，まったくすらすらと口から流れ出る．これに対して第二の保存形式では，その文章を暗誦した，その時々，その所々の誦読の一回一回が独立的に記憶されていて思い出される．第一の保存形式の場合は，言ってみれば身体的習慣となった過去保存で，口に出して実際に暗誦するためには，現実に一定の時間が必要である．それに対して第二の保存形式の場合では，各音読の記憶であるから，それらは自由に伸縮して思い出される．前者は身体的動作であり，後者は表象であって過去のイマージュである．そしてさらに，一方はただ繰り返えし反復することであるから真の時間からはずれ出て非人格的となるが，他方はその時とその所に結びついているものである．この意味において，前者は非個性的な思惟に過ぎず，後者こそ個性的に体験されたもので，これこそ真の思い出なのであり，思い浮かべられるものである．このことからして，前者は自動的な身体的運動機構になっている習慣であり，「私の現在」の一部なのであって，ここには表象があ

り得ない．それは過去を表象するのではなく，過去を演じているのである．それに反して，後者は表象である．それは表象であるからこそ意識的に伸縮も可能なのである．

以上のことから，二種類の過去の蓄積の仕方があることが明らかになった．一つは運動機構としてであって，それは過去を現在の行動にいわば無自覚的習慣的に利用するためのものである．他の一方は過去の出来事を，時や所はもちろんのこと，その色合いや容貌まですっかり保存しているのであって，それは行動にまでは連動しない記憶心像としてのイマージュである．一方は反復し，他方は心に思い浮かべられる．前者は意志によって形成され，意志の支配下で制御されるが，後者は保存ということでは実に忠実で明確であるけれど，それを心に思い浮かべる再生ということに関してはすこぶる気ままなのである．

純粋な状態のままで記憶を分析すると，上述のように二種類のものが取り出される．それらはあくまでも理想型として純粋なままで取り出される記憶であって，現実にはそのままの形で存在することはないのである．通常は二種の記憶が混成した状態で現われているものである．混成的状態とは，運動機構としての脳に属する行動的な部分と，思い出である記憶心像としての表象的な部分とが混在して機能していることである．実際の記憶に関しては，その二種の記憶が混成状態にあるのが現実のことなのである．言いかえれば，現在の知覚と過去の知覚が結びついて，われわれの日常の行動は展開されているのである．両知覚の結びつきは典型的には，再認という現象において現われている．再認とは「前に見たことがある」という感じであって，現在目の前にあるものがすでに過去に持ったイマージュと同じである，という意識状態である．したがって，記憶の本性を明確にするために，その常態である再認を取り挙げて，分析し考察することがつぎの問題になる．

(2) の証明

「前に見たことがある」という感じを説明するのによく用いられる，再認の学説の主なるものに二つある，とベルクソンは言う．その一つは，現在の知覚の再認は思考によって現在の知覚を過去の環境に嵌め入れることである，という考えである．前に会ったことのある人に再び会えば，前に会ったときの知覚に付帯した諸事情が心に浮かび，現在のイマージュの周囲に，現に認められている枠ではないいまひとつの枠をえがく，ということで再認が行なわれる．現在の知覚に，かってそれと近接して与えられたことのあるイマージュを連合させる，ということでもある．しかしベルクソンは，この説明は成立しないと言う．たとえば，いま初めてある人に会うとする．そのときの最初の知覚をAとし，付帯事情 B, C, D が近接によってこれに連合しているとする．つぎの機会にその人に会ったときの知覚を A′ とすれば，B, C, D のそれぞれが結びつくのは A′ ではなく A であるから，B, C, D の諸項を喚起するためには，類似による連合が先ず出現させるのは A である．A′ は A と同一であると言っても無意味である．その二つのものは似てはいても，数のうえではあくまでも区別され，A′ は知覚であるのに対してAはすでに記憶であるに過ぎない，という単純な事実によってもすでに異なっているからである．

第二の説では，再認とは現在の知覚が記憶の底に入って行って，自分に類似した過去の知覚の記憶を絶えず求めることである，と説明される．しかし，再認の過程が，知覚と記憶の並置あるいは融合によるそれらの連合という考えを用いる立場で説明されるとしても，しかしもとの記憶のイマージュが消え失せるときには，再認は消滅するであろうし，この記憶のイマージュが保存されているときにはいつでも再認は生じることになるであろう．そうであるとすると，精神盲，いま見て認知している対象の再認不能症は，視覚的記憶の障害なしには起きないし，またとくに視覚的記憶の障害は例外なく精神盲を結果するはずである．ベルクソンはこの考えもま

た，事実に反しているので誤っていると言う．なぜなら，ヴィルブラントやリサウエルらが研究した症例では，患者の婦人は眼を閉じて自分の住む町の様子を述べることや，自分で町を歩くところを想像することができた．ところが本当に街へやって来ると，すべてが新らしく思われて，何ひとつ再認することができず方角もわからなかった．患者は名ざされる物の内心の映像を喚起することができるし，その姿をまざまざと述べる．にもかかわらず，実際にそれが提示されると，再認することができない．したがって，視覚的記憶を保存するだけでは，たとえ意識的にそれを行なうとしても，類似した知覚の再認には不十分なのである．しかし反対に，シャルコの研究による視覚的イマージュが完全に蝕まれた典型として有名になった症例では，知覚の再認がすべて消滅しているわけではない．患者は故郷の町筋の名を言うことも方角を見い出すこともできなかったという点では，それらをもはや再認していない．しかしその患者は，それが町であり，家が見えているということはわかっていたのである．彼はもはや妻子を再認しなかったけれども，しかし彼等を認めつつ，婦人や子供たちであることを述べることはできた．文字通おり絶対的な意味で精神盲が起こっていたのならば，こうしたことはすべて不可能だったはずである．

したがって，これらのことから結論されることは，再認は必ずしもすべて古いイマージュの介入を必要とするものではないということなのであり，また古いイマージュと現在の知覚をつけ合せることができなくても，その古いイマージュを呼び出しそれに訴えかけることもできる，ということである．すなわちこのことは，再認は不能でも記憶心像を想起することは可能であることを示している．だから，消滅しているのは或る種の再認なのであって，再認能力一般ではなかったのである．それでは再認とはいったい何であるか，が問われることになる．

再認には二種類あると考えるべきであろう，とベルクソンは提案する．一方は瞬間における再認ともいうべきものであって，はっきりしたいかな

る記憶の介入もまたずにただ身体だけでやれる再認である．それは行動からなるものであり，表象からなるものではない．たとえば長く住み慣れた町の通おりを歩くときには，人は通おり過ごす物のはっきりした知覚を持たないで，まったく機械的に歩き廻わる．その場合に行なわれている再認は無意識的であって，すべからく自動的である．この第一のものは，自動的再認ともあるいは運動的再認とも言えようし，無意識的無意志的再認とも言えよう．他方の再認は，久しく会わなかった友人に偶然会って，その人を再認するときのような記憶心像の介入をまって現われる注意的再認である．この再認は，知覚されている対象自体にわれわれを引きつけ，記憶を意志的に介入させ，したがって行動を止めさせて思弁的，過去的に再認させる性質のものである．この意味で，これは表象的再認とも意志的再認とも言えよう．それに反して，第一のものは身体による再認であって，知覚されている対象から却ってわれわれを引き離し，われわれを行動に移らせるのであるからいわば未来的である．ベルクソンは以上のように，再認にはまったく種類の異なる二つの型があると考える．そしてそのことに応じて，再認不能の疾病には，知覚と運動の結合が切れる場合に発病するものと，運動と古いイマージュの結合が切れる場合に発病するものとの二種類が存在する，と推測されている．

前者の場合に起こる精神盲と呼ばれている病気は，以前は先行症 apraxie と言われたものであって，数多くの症例が存在する．方向感覚の消失などはその一例である．精神盲患者は数カ月にわたって練習しても，自分の室内の勝手がのみ込めないのである．これは視覚と身体運動を結合する能力が欠けているからと考えるほかはないであろう．また精神盲患者が画を描くときの特異な仕方は典型的である．それは運動によって連続的に一息に描くのではなく，逐点法と言われる仕方，すなわち点と点を結ぶという描き方をする．さらにその病気で殊に多い言語盲では，模写と原字の一致を確かめるために，一つ一つ点と点を反復比較していて，両者を運動

的にいわば一気に比較することができないので，患者は文字を模写することがなかなかできにくいのである．

つぎに，過去のイマージュを現在の運動に結びつけることができない後者の場合に，発病する精神盲については，それを解明するためには先ず記憶から運動への漸次的な移行ということが明らかにされる必要がある．それは先きに掲げたつぎの (3) の問題である．

(つ づ く)

注

(1)　慶応義塾大学日吉紀要『人文科学』第5号．

参 考 文 献

1. Henri Bergson, "Essai sur les données immédiates de la conscience", PUF.
   "Matière et mémoire", PUF.
   "L'énergie spirituelle", PUF.
2. 坂田徳男，沢瀉久敬編『ベルグソン研究』勁草書房．
3. 市川　浩著『ベルクソン』講談社．
4. 沢瀉久敬著『アンリ・ベルクソン』中央公論社，
   『ベルクソンの科学論』中央公論社．
5. G. ドゥルーズ，宇波　彰訳『ベルクソン哲学』法政大学出版局．
6. J. シュヴァリエ，仲沢紀雄訳『ベルクソンとの対話』みすず書房．
7. A. D. セルティランジュ，三嶋唯義訳『アンリ・ベルクソンとともに』行路社．
8. 池辺義教著『ベルクソンの哲学』第三文明社．
9. 『ベルグソン全集』全9巻，白水社．